

2014 年度 Happy くらす作品コンクール 授賞式・座談会

2014 年 11 月 10 日、授賞式が行われ、引き続き「青山学院大学の教育をより良くするには」というテーマの下、座談会を開催しました。

Happy な授業の思い出を作品にして提出してくれた受賞者のみなさんと、全学 FD 委員教職員で意見を交わすことで、学生が望む授業をつくるためにはどうしたらいいのか考察する有意義な時間となりました。

～はじめに～



全学 FD 委員会委員長

学務及び学生担当副学長 長谷川信

長谷川：副学長の長谷川です。私は教務関係、学務関係の仕事を主としておりまして、その関係で全学 FD 委員会という組織の委員長をしております。所属は経営学部の教員をしています。今日は『Happy くらす作品コンクール』ということで、皆さんに応募していただいて、どうもありがとう。『Happy くらす作品コンクール』というのは、もうご存じの通り、学生の皆さんが実際に授業に参加して、どんなふう成長したかとか、または大変楽しい授業であったという、むしろ積極的な感想をいただいて、それが先生たちの授業の励みにもなればということで、毎年行っているものです。そういう有益な場として、今後とも続けていければいいと思っています。今日は受賞おめでとうございます。昨年度の『Happy くらす作品コンクール』で、授賞式のあとに懇談会をしたのですけれども、有益なご意見をたくさんいただきました。本日はよろしくお願いします。

杉谷：全学 FD 委員会副委員長の杉谷です。学部は教育人間科学部の教育学科になります。私の専門は教育学の中でも、大学の教育や大学生のを中心にして研究していますので、本学の FD の仕事にも結構長年関わっていくようになりました。ちなみに、松本くんは私のゼミ生で、FD に積極的な学生さんです。よろしくお願いします。

大山：法学部の大山と申します。昨年から全学 FD 委員会の委員になりましたので、ここに列席している次第です。よろしくお願いします。

戸田：全学 FD 委員会の委員で、FD 活動を事務職員として支え

ております学務部教育支援課の戸田と申します。よろしくお願いいたします。

鳥海：同じく学務部教育支援課職員の鳥海と申します。今日はよろしくお願いします。

土居：同じく教育支援課の土居です。よろしくお願いします。

松本：学生 FD スタッフの前代表で、教育人間科学部教育学科 4 年生の松本侑也と申します。本日は我々学生 FD スタッフが選定した学生 FD スタッフ特別賞の授与のため、出席させていただきました。まさか僕が賞状を渡すようなことになるとは思っていませんでした。よろしくお願いいたします。

長谷川：では、感想からお聞きしましょうか。

酒井：今回の作品は、今まで自分が受講した授業を文章として残しておきたいという思いから応募したのですけれども、このように評価していただいて、このような賞をいただけたことは大変うれしく思っています。ウェブサイトや入賞作品集で、こうして自分が記した文章が出されるということで、多くの方に読んでいただけたらと思っています。今日はありがとうございます。

木村：自身で立てた「大学のコンクール関係に全部応募しよう」という目標が、今回の応募につながりました。「参加することに意義がある」みたいなものです。本当に立派な賞をいただけて、文字数もそれほどありませんでしたし、まさか自分が受賞できるとは思いませんでしたので、すごくうれしく思っています。

～心に残る授業～

杉谷：素晴らしい。ありがとうございました。それでは本格的に座談会を始めます。今回は、「心に残る授業」というテーマでしたけれども、振り返ってみてどうですか。青学の授業で、心に残る授業はいっぱいありますか。

酒井：心に残る授業ですか。

大山：何でこの授業を選んだのですか？酒井くんは韓国語の授業ですが、作品にも一応書いてありますけれども、どうしてこ

の授業を選んだかお聞きしたいです。



優秀賞・学生 FD スタッフ特別賞 酒井優清さん(史学科 3 年)

酒井：私がこの授業を履修したのは、シラバスを見たときに、インテンシブという徹底的に集中してすごくハードに、密度の濃い授業をすると書かれていたからです。そういうことが書かれていると、履修する人もすごく少なくなるのではないかと思います。本気でやろうと思う人しか集まらないので、そういう中で勉強をしていくというのは、自分をすごく高められるのではないかと感じて、履修しました。



佳作 木村匠さん(国際経済学科 2 年)

木村：僕の場合は必修の英語の授業で、受講しました。毎回半期ごとに先生が変わるシステムになっています。この授業は、本当に自由でした。取りあえず、出れば AA をくれます。授業終了間際に入ってきて、出席カードを書かせてくれます。人によっては、「それは良くない」と文句を言う人もいますし、「優しい」と言う人もいますけれども、いろいろな意味で賛否両論のある先生なので、すごく授業の受け応えがありました。まあ良かったと思います。

鳥海：その授業は、一番上のクラスですか。

木村：いいえ、一番下です。

鳥海：レベルごとにクラス分けがされている授業なのですが、大体 30 人もいないですよね？

大山：それで出席カードを使うのですか。

木村：出席を取るという意味ですかね。学籍番号と名前を書くボードがあって、来たときにそれを回すのですけれども、いつでも来れば渡してくれて、出席を取っていました。

大山：そういうふうになると、「適当にやれば、いいや」ということになりそうなものですが、これを読ませていただくと、

皆さん、ちゃんとやられたんですね。

木村：はい。

大山：ちゃんとというか、かなり気楽にもなったでしょうか。同じ目標を持って、みんなでチームワークを組んで、やっていたみたいですが、どうしてそうなったのか、何か木村さんのほうで思い当たるようなことがありますか。はっきり言うと、学級崩壊とまでは言いませんけれども、そうなる可能性があった中で。

杉谷：「易きに流れる可能性があるのに」ということですね。

木村：僕自身があまのじゃくな性格がありまして、周りがガッツと頑張ると僕は一番後ろの席に座ってフーンと周りを見ている感じですが、せっかくその授業を取ったのですから頑張ろうというのもありました。授業の内容はプレゼンテーションで、僕の得意分野でもありました。自由で制限がないので、パワーポイントを使わなくても、違うソフトでもいいですし、発表の仕方が何でもよかったですね。ですから挑戦できる環境でした。「パワポしか使っちゃ駄目」とか、「制限時間は 5 分」とか、そういう縛りがあると、逆にやる気をなくしてしまいました。自分の可能性を試す上で、チームのメンバーにも話して、「めっちゃいいのを作ろう」と、やったこともありました。

大山：この授業で、皆さんが最後はそうになりましたか。それとも、多くは適当にやってしまいましたか。どちらですか。

木村：後者です。

大山：やはり後者ですか。

木村：僕だけがガチで本気でやって、周りは原稿を読んでいたたりして、中には USB を忘れてスライドがないチームもありました。寝ていたり、出席だけ取って途中で出て行ったり、確かにいろいろありました。だからこそ、こういう思いが生まれたのでしょうか。

杉谷：お二人とも、語学の授業でしたよね。他の語学と違って、やはりすごく思い入れが出たのでしょうか。

木村：そうですね。

杉谷：その辺りは、酒井さん、どうですか。

酒井：ほかのスペイン語やドイツ語はアルファベットですが、韓国語の場合は、ハングルという独特な文字形態ということで、最初に見たときは、読み方も全く分かりませんでした。「何だろう。不思議な文字の形だな」と思い、「これを勉強したら面白そうだな」と思って、韓国語を第二外国語として選んで入学しました。

大山：私も昔は韓国語をやっていましたけれども、大変でした。当時、私の大学の先生は、出てくれるとうれしいので、出席していれば AA をもらえてしまうという状態でした。なので、私

はほとんど韓国語はできないのですけれども。

杉谷：成績は良かったのですか。

大山：成績は良かったです。ただ、やっていて、辞書ハングルを引いて、同音異義語が 10 個とかあったりして、もう挫折しそうなったような記憶があります。

酒井：そうですね。

大山：漢字で書いてくれれば、こんなことないのと思ったのですけれども。

杉谷：授業のレベルはすごく高かったということですか。

酒井：そうです。ネイティブの先生と日本人の先生がいらっちゃって、どちらかという日本の先生方は、「皆さん、これぐらいできるでしょう」という感じで、結構高いレベルを要求されました。ネイティブの先生もレベルは高いですけども、自分の韓国語がちょっと変でも結構フォローしてくださったりして、「ここはこうだよ」と教えてくださいました。

杉谷：課題はいっぱい出ていましたか。

酒井：はい。日本人の先生の場合は、たくさんの課題のプリントをあらかじめ何十枚も、「毎回、持ってきてください」ということで、最初に渡されました。自分の場合は、本当にこれを受けたときはちょっと韓国語が苦手だったので、毎回予習をちゃんとしました。その先生は「予習しなくていい」とおっしゃっていましたが、自分はちゃんと予習をして行かないと追いつけないぐらいだったので、やはり予習というのは語学においてはすごく大切だと思います。

杉谷：宿題自体は、そんなに厳しくはなかったのですか。

酒井：そうですね。宿題は特に厳しくなかったです。

杉谷：けれども、「自主的に」というお話ですね。

酒井：「自主的に」ということです。

杉谷：予習して行ったということで、一生懸命努力したということですね。

大山：普通だと、「挫折しちゃうんだろうな」という、ちゃんと言って、しかも早く行って、ノートも広げて、「すごいな」というのが正直な感想です。

酒井：自分以外の全員が女子ということで、できる人が横にいるので、絶対に負けたくないと思いました。努力の面では絶対に負けたくないと思ったので予習しました。

杉谷：履修していた人は、人数が 10 人と書いてありますけれども、みんながついていけるくらいのレベルですか。

酒井：そうです。自分は 2 年生の去年に受けて、そのときに 3 年生の方で、もうその前から韓国語を勉強されている方とか、自分は韓国にはまだ留学したことがありませんけれども、もう留学経験のある方とかで、自分よりも皆さんはできる感じでした。

た。

杉谷：では、他の皆さんは挫折せず？

酒井：そうです。多分、皆さんは自分ほどこんなに深刻にとらえてはいなかったのではないのでしょうか。

杉谷：余裕な感じですか。

酒井：こういうことを言っただけは失礼でしょうが、皆さんは気楽に受けられていたのではないかと思います。

杉谷：伺っていますと、両方とも授業が割に自由な感じですよ。あまり厳しいノルマを課されるわけではなく、それを自主的にやってきたというところが共通していると思いました。ただ、周りの雰囲気が、酒井さんの場合は、「一緒に履修している人に触発されて」という感じですけども、木村さんの場合は、「あまのじゃく」と言い、「僕は頑張るぞ」という感じですね。

大山：木村くんが、「頑張るぞ」だと、チームのほかの人が乗ってくれないとか、ありそうですね。

木村：はい、ありました。リハーサルのときに大幅に遅刻して来たり、やってなかったこともありました。その分は、違う人がフォローしてくれましたので、助かりましたけれども、実際にありました。

～高校と大学 授業の違い～

鳥海：木村さんの授業は 1 年生の、ある意味では一番初めの授業ですよ。

木村：割と始めのほうです。

鳥海：皆さん戸惑いというか、何をしたらいいかわからないという問題などはありましたか。これまでの高校の授業ですと、先生から教えられたものを覚えたりしていたのが、大学では全然違うふうになると思います。今この読ませていただいたかぎりだと。そのときには、やはり戸惑いというか、いろいろな方向に話が飛んでしまったりということはありませんか。

木村：この授業に関してのことですか。

鳥海：はい。

木村：この授業は PC ルーム、CALL 教室でやっていました。内進生が結構多いクラスで、3 人か 4 人いました。だから内進生を中心として、だらけます。みんなが新鮮なピリッとした空気ではなくて、もう慣れている感じの子が何人かいて、一緒にだらける感じでした。

大山：確かに 1 割でもそういう人がいたら……。

木村：教授は、あまり日本語が上手ではなくて英語しかしゃべれなかったの、何を言っているのか分からないのです。聞き取れないし、課題を提示されても、何の課題か分からないし、

どうやるのか分からないから、あきらめるとか、もう聞かないという人はいます。そこは、ある程度の日本語が通じる教授だと、もう少し雰囲気が変わったかもしれないと思っています。長谷川：今シラバスを見たら、全部英語ですよ。

杉谷：松本君は、どう感じましたか？

松本：僕にはできないような、とても勉強に真摯に向かっている姿勢が素晴らしいと思います。僕は常に逃げ腰の姿勢でいろいろ臨んできて、語学に関しては、特に先生との仲をつなぐ感じでやっていたので、こんなに朝早く、一番に授業に参加するのはすごいですね。

酒井：実は、自分が高校生のころの3年間の授業は、チャイムが鳴ると同時に先生が入って来られて、すごく厳しいというか、授業時間をたっぷり使ってきっちりやるという感じがありました。朝とても早く行くというのは、その習慣が身に付いていたのではないかと思います。

松本：一番というと、朝8時半ぐらいですか。それ以前ですか。

酒井：そんなに早くは行かないけれども、前もって教科書とかを机に置いておかないとだめですね。例えば別のことをやっていると、怒られることがありました。それぐらい、「今から始まる授業に対して、ちゃんと向き合え」というような精神を教えられたというか、すごく厳しかったです。

杉谷：それは、この授業ではなくて、高校時代に？

酒井：はい。高校のころにそういうのがあったので、大学に入っても基本的にはちゃんと、当然ですけども、時間前に行って待っています。ちょっと失礼ですけども、大学だと結構遅れて来る先生もいらっしゃるので、驚いたりもしています。

大山：確かに、私もチャイムが鳴り終わったら同時に始めてしまうので、そういう先生は自分たちの学生時代にはいなかったと思います。

木村：僕は今、月曜から木曜までが1限必修で、金曜日は情報メディアセンターのほうでアルバイトをしていて、それで1限に撮影の仕事をしなないといけないので、逆に全部が1限だと、規則正しくなってしまうのです。だから今は、毎朝8時過ぎぐらいに大学に来て、朝ごはんを食べてから授業に出るみたいな、高校のころを思い出すような感じになりました。やはり日によって、「明日は3限から」とかになってしまうと、去年まではだらけていました。

長谷川：先生も毎日1限から、どうですか。

杉谷：厳しいです。1限の授業を履修する学生さんは、必修とかは除いて、「熱心な学生さんが多いかな」というのがあります。一生懸命ですから、こちらも触発されて頑張ろうという気になるのですけれども。

～第二外国語の選択～

長谷川：酒井くんは、今は韓国語Ⅲを取っているのですか。

酒井：はい、そうです。

長谷川：どうですか。だいぶ韓国語に自信が付いてきましたか。酒井：いいえ。韓国語Ⅲともなると、強者（つわもの）たちが多いので、それに追いつこう、追いつこうということで、いつになったら自分が一番できるようになる日が来るのでしょうか。

杉谷：でも、Ⅱを取っていた人が、そのままⅢを履修しているという感じですか？

酒井：そうです。Ⅱを取っていた人や、去年このインテンシブを取って履修していた方がいますので、やりやすいと思います。

長谷川：なるほど。今は何名ぐらいでやっているのですか。

酒井：今も10人ぐらいです。それでも、男子は自分ともう一人です。なぜか韓国語は、あまり男子が好かないのかもしれないかもしれません。女子が多いです。

大山：多分、英語の授業などでもですが、語学への関心は一般的に女性のほうが大きいのでしょうか。

酒井：ああ、そうですね。

戸田：女子のほうが真面目に勉強をしますよね。

大山：語学は真面目にやらないと駄目ですからね。

戸田：きちんとやるタイプが多いということですね。

杉谷：今回の受賞はお二人とも男性ですね。Ⅲが一番難しいですか？

酒井：インテンシブも、2年生から4年生までの履修で、韓国語Ⅲは3年生と4年生なので、いい感じであがってきていますね。Ⅲが一番上のレベルだと思います。

杉谷：韓国語を使って、留学するとか、将来に何かつなげるといことは？

酒井：そうですね。韓国語は、使えればいいのですけれども。

長谷川：史学科では、どんなことをやろうと思っているのですか。

酒井：自分は史学科では韓国のほうを勉強しないで、一応西洋史をやっています。

長谷川：西洋史ですか。

酒井：「韓国語をやっている」と言うと、いろいろな方から「東洋史をやっているんじゃないか」と言われます。

長谷川：そう思っていました。

戸田：原典講読で使えるでしょうし。

酒井：韓国語を履修して、もし東洋史を取っていれば、確かに東洋史を研究してやっていく上ではすごくいいと思います。た

だ自分の場合、西洋史を選んで良かったと思うのは、やはり韓国語というのは東洋、アジアのほうで韓国語を学ぼうということで、社会や文化というものを知ることができます。その一方で西洋史を勉強して、西洋のことを学ぶことで、すごく広い視野を身に付けられたのは大きな収穫というか、良かったことだと思っています。

大山：不真面目な私ですら、韓国の文化というとは少しは知っています。日本の在日の人たちもどういふという話とか、授業で聞いて少しはイメージできましたので、そういう意味では少し視野が広がったかなと。韓国語については、それしか私は取りえがないのです。

杉谷：でも、そうするのに、語学というスキルだけではなくて、視野が広がったわけですね。

酒井：そうですね。

杉谷：しかも、ほかの勉強にも影響を与えるという意味では、すごく得たものが大きいですね。

酒井：はい。大きいと思います。

杉谷：そこまで行くのに、時間がかかるのですね。

長谷川：大変ですね。例えば第二外国語の授業をⅢまで受けてこられて、「こんなふうにしたほうがいいな」と、思われるところはありますか。

酒井：やはり外国語の種類を増やしてほしいです。

長谷川：ああ、第二外国語ですね。

酒井：例えばイタリア語は、第二外国語としては多分ないとか。

長谷川：ないです。

大山：イタリア語はないのですか。

戸田：文学部共通科目にはありますが、青山スタンダード科目ではないですね。

長谷川：文学部でやっているだけですね。

酒井：自分は史学科なので、例えばイタリアを専攻する人が研究をするときに第二外国語にイタリア語がないと、つらいというか、「ちょっと」という方もいますので、やはり種類がバラエティーに富んでいると、すごくいいと思っています。

～授業で得たもの～

杉谷：木村さんも、授業で得たものを生かせるような場面などありましたか？

木村：今、酒井さんが、視野を広げるために韓国語を学ばれたと言われたのですが、僕なんかは不純な動機しかありません。フランス語を取っていますけれども、フランス語はおしゃれというイメージや、国際結婚できるかもしれないと考えて取っていましたから、今、苦勞しているのです。

大山：確かに、フランス語は動詞の活用や変換もすごいですね。

木村：そうです。活用とかは難しいです。僕の場合は研究しようと思って授業を取るといふよりは、幅広い科目を薄く浅く取って学ぶタイプなので、本当に逆のような気がしてきて今すごく恐れ多いのですけれども。ただ3年のゼミで、国際マネジメントや株、金融工学に詳しい方がいて、すごく具体的な学べるのかと期待はしています。そうしたら、投資とかをもっと学べるのだらうと思っています。まだマクロ経済やミクロ経済といったすごく抽象的なものしかやっていないので、あまりイメージできないのですけれども、今やっていることが何かに生かせるのかといふのは、これからちょっと見つけたいですね。

大山：プレゼンといふのは、何かやったわけですね。プレゼンをやられたのは、多分初めてですよ。

木村：はい。

大山：何か2年生の演習とか、授業で生かせたりしませんでしたか。

木村：はい。生きていますね。この授業のときもそうでしたけれども、周りが真剣だと緊張してしましますが、周りがだらけているので工夫のしがいがあります。自分が何かのジェスチャーをやっても、誰も見ていないからワーっとやっていました。それが今に生かしています。このときは、こうしたら寝ていた頭も起き上がったとか、ここで何かこういうことを言うとか、あるのですよ。それで、聞く側の視点といふものを考えるようになってからは、プレゼンがすごく良くなりました。今、本当にパブリックスピーキングでは、スライドなしで英語を話さないといけないことがあるのですが、どういうジェスチャーや言葉を使えばいいか分かるようになりましたので、このときの経験は大きいですね。

杉谷：この授業では、15週間をかけて2回のプレゼンをやるといふことでしたね。

木村：はい。

杉谷：すごく苦勞したところは、どんな点がありましたか。

木村：そうですね。

杉谷：スケジューリングのことがネックでしたか？

木村：必修科目とかが多いので、グループで4人ぐらいいると、なかなか会える時間がなくて、苦勞しました。

杉谷：4人で発表ということですか。

木村：最後は2人だったのですけれども、最初は4人でした。なかなか空きコマが合わなくて、夜に Skype で話し合ったり、Google ドライブを使いながら編集したりして何とかやっていたのですけれども、直接話して物事を決めるのと比べるとすご

く苦労してしまいました。リハーサルのときに、「じゃあ、こうやろう」と言ったら、意見が擦れ違っていました。直接会って話していなかったから、そういうことがあるのです。プレゼンの時間も30分と長かったですね。

杉谷：それは英語と日本語で発表するのですか。

木村：日本語も使ってよくて、ただ先生は日本語が得意でないのでメインは英語ですけれども。先生には英語で、周りの学生には日本語も使いながら発表し、みんなに分かるように伝えるというのが基本でした。7週間とか、実質5週間ぐらいをかけて、それだけの作品というかプレゼンを組み立てていくのは、苦労しました。

大山：授業の中では、プレゼンテーションの準備は、ほとんどなかったわけですか。その7週間って、ずっとプレゼンの準備ではないですよ。

木村：ええ、ずっと準備ではなかったです。先生が読み物を読ませたりしました。メインはプレゼンです。

大山：どんな内容のプレゼンでしたか。

木村：最初は、「地球環境を守ろう」みたいなプレゼンです。アースデイという環境の取り組みで、実際に代々木公園に写真を撮りに行ったりして、ここだったらちょうど近いので・後半のプレゼンは、MIT メディアラボ所長の伊藤穰一さんという人です。誰でもいいので、誰か1人を紹介するというプレゼン内容です。

大山：それは先生が指定されたのですか。

杉谷：共通のテーマということですか。

木村：そうです。大体共通でした。

杉谷：そのタイトルで各グループが工夫するということですね。共同作業はなかなか難しいですね。

木村：難しいです。

～学生の集まれる場所 学習環境・学習時間～

鳥海：学内で、そういった勉強をするための集まりやすい場所がありますか。

木村：集まりやすい場所ですか。あらかじめ時間が決まっているのでしたら、8号館の学習室がきれいでコンセントもあります。あとは7号館のフロアがすごく空いていることが多いので、昼休みとかはあそこを利用しています。

鳥海：17号館3階にプロジェクターが付いたラウンジがあったりするのですけれども、それを使ったことはあったりしますか？

木村：それは知りませんでした。その17号館3階のラウンジのところのプロジェクターというのは、使えるのですか。

鳥海：申請すれば、自由に使っていい設備で学生生活部が管理しています。

木村：それは、どこかで情報が公開されていますか？

鳥海：しているはずですが、もしかしたら周知できていないかもしれません。周知するようにします。

戸田：もったいないな。

木村：ぜひ利用させていただきます。でもほとんどの学生は、2階のパソコン教室の228教室では自由にしゃべれるので、共同作業ではそこを使っています。

戸田：2号館2階ですか。

木村：はい。228教室だけは、しゃべってもいいパソコン教室です。

長谷川：8号館の1階の学習室は、しゃべってもいいのですか。

木村：はい。グループ学習室の中だけは、しゃべってもいいです。きれいです。鍵が必要ですが。

杉谷：酒井さんは、予習とかの勉強は大体大学でやるのですか。

酒井：自分の場合は家でやります。家でやりやすい人もいれば、大学やそういうところでという人もいます。それぞれ勉強する学習環境は、予習の場合は人それぞれだと思います。

杉谷：これは週1回の授業ですか？

酒井：週に2回で、2コマです。

大山：違うかもしれませんが、普通に第二外国語をやる人よりも、確かインテンシブのほうがコマ数は多いですよ。

酒井：多いですね。

鳥海：週4コマですから、ほぼ毎週360分の韓国語の授業を受けるわけですよ。

酒井：そうです。

杉谷：日にちは全部バラバラですか。

酒井：はい。

杉谷：週に4日ですか。

酒井：僕の場合は水曜日と土曜日で、それぞれ1・2限ですね。

戸田：水曜と土曜というのは、休みにしてしまう学生さんが多いのではないですか。

酒井：ああ、そうですね。

杉谷：予習は、時間的にどれぐらいしていたんですか。

酒井：多分、去年取った授業の中で、一番予習して行ったのではないかと思います。相当、2～3時間ぐらいですかね。

杉谷：その2コマの授業に対して、ですか。

酒井：それぞれ2～3時間ぐらいです。



杉谷：それぞれですか。

大山：ということは、合計で4～6時間ですね。

酒井：そうなります。

杉谷：週4～6時間ぐらい予習しているのですか。

酒井：そうです。

長谷川：単位計算上は、それでいいかもしれません。

大山：まあ語学だから2単位だから、十分ですね。

杉谷：平均的な学生の学習時間より、はるかに長いですね。

酒井：大学生になると、勉強時間がすごく少なくなっていますよね。それというのは、やはりサークルとか、別のことに時間を使う学生が多いんですかね。

大山：むしろそれは、私たちが教えてほしいですね。お友達を見てみて、実際どうですか？

酒井：聞いていると、やはりアルバイトをすごくしています。自分としては学業が本業だと思うのですが、アルバイトを理由にして授業を休んでいる人も少し出てきていて、それはどうなのかなと思っています。

木村：人間関係を優先させるために、お金を稼いでしまう人が多いみたいです。例えば、よく合宿とかに行くゼミやサークルが多くあります。ユニフォームを揃えたりしてお金がなくなってしまうから、バイトに行っ稼いで、頑張って空いている日は全部バイトを詰め込んで、サークル活動やゼミにいそしんで。そうすると勉強とか予習もできなくて、授業中に疲れて寝てしまったりします。また、夜は終わりまでずっと働いているという子は結構周りにいますが、すごく大変そうだと思います。

杉谷：お二人は、サークルとかアルバイトはそんなに忙しくはないのですか。

酒井：自分はやはり学業が一番大事だと思っていますので、時間の都合がつきやすいアルバイトというか、すごくシフトとかをいっぱいばんばん入れているというやり方ではないです。やはり調整しやすいような。

木村：僕は国際政治経済学部の外交・国際公務指導室に入っていて、毎週土曜日は勉強しています。それがサークル代わりになっています。バイトは、昔は集団対象の塾講師をやっていて、時給が1,800円位ですごく良かったのですが、やはり責任が重くて、スーツに着替えないといけないとか、保護者との面談をしないといけないとか、予習をしなくてはならないとか

で大変でした。それで、大学の情報メディアセンターのアルバイトに変更したらすごく楽になって、空きコマはそこで働けるし、私服でいいし、交通費はないけれどもすぐに行けるということで、周りに頼らずに学内でうまくいっているのは幸せだと思っています。

長谷川：プレゼンテーションの準備とかで集まる時間みたいなものは、なかなか確保するのが難しいですか。

木村：周りと同じ授業を受けているわけではないので、難しいです。

長谷川：そうですね、みんなバラバラですからね。

木村：それが一番困るのですよね。議論の時間は、隔週でやってくれるとうれしいのですが、中には毎週グループで活動というのが、授業によってはあるので、こちらとしては、「いつ集まれと」という、文句を言いたいぐらいです。そこを何とか、やる気がある人は放課後に集まってくれたり、朝7時に集まってくれたりするのですが、普通の人はバイトとか、サークルや部活で忙しかつたりします。本当に組み合わせが大事です。

長谷川：最近は割とグループワークをやる授業が、だんだん増えてきています。その辺は、実際にはどうなのかと思っていたのですけれども。

木村：はい。

長谷川：大学は、集まる場所を作ろうとしているのです。17号館のウイングのところに、ちょっと座れるようないすを作るとかですね。

木村：はい。

長谷川：図書館の中も、ちょっと作ったりしているのですがね。ただ、実際に集まる時間がないとね。

木村：そうですね。

長谷川：はい。

鳥海：休み時間は短いと思われませんか？以前よりは、少し長くはなったのですが、

大山：5分でしたからね。

木村：5分だったのですか？

大山：相模原キャンパスは10分か、15分ですか。青山は5分でした。本当に移動するのが、われわれも大変でした。

木村：5分では何もできないですね。途中で抜けられる授業だったらトイレに行ったりできるのですが、少数精鋭のクラスで

はそれができないので、おなかですいても買いに行けないし、トイレもおなか痛くなっても抜けられなくなっていたから、今の15分はその5分ときから考えると、すごくいいと思います。

鳥海：やはり、ぎりぎりというか、移動してちょっと準備して、すぐ授業が始まってしまうみたいな感じですか？

木村：はい、そんな感じです。昼休みは長いのですか。

鳥海：長くなりました。

木村：長くなったのですか。

杉谷：前は40分でした。

木村：それを短いという声、いっぱい聞くのですが。

杉谷：50分だと短いと。

木村：はい。長くなったのですね。

杉谷：そう思います。移動に結構時間がかかったり、今は混雑してしまっ

木村：そうですね。人が増えて。

大山：教室が同じようなところで、同じ階だったりすればいいのですけれども、例えば8号館や9号館でやって、次は17号館とか。

木村：ああ、あります。

大山：今度こっちの14号館とか。

戸田：ここなんかは、エレベーターを待っているだけで、もうすごい時間がかかってしまうでしょう。

木村：そうですね。

長谷川：酒井くんは大学で、授業以外で勉強する時間はどこで勉強するのですか。合同研究室は使いますか。史学科合同研はあまり使わないですか。

酒井：あまり使っていないです。図書館は結構行きます。図書館はすごく静かだと思います。

長谷川：史学科は、あまりグループワークとかはないですか。

酒井：そうですね。

長谷川：ないですよ。

酒井：木村さんの授業でのプレゼンテーションにしても、国際政治経済学部や法学部の授業は極めて実践的な学問ですが、文学部だとやはりどうしても、その学部の性質があるのでしょうか。机に座って大量の本と向き合って本をたくさん読んだり資料を読んだりという授業が多いです。唯一、プレゼンテーションを学べる授業というのが青スタなのですが、青スタも抽選というのがあります。プレゼンテーションとか、そういう実践的なグループワークなどに応募したのですが、全部落ちてしまいました。それで取れないと、もう取りようがないので、文学部にもそういった授業が必修等で履修できたらいいと思

っています。

杉谷：一応、もうゼミに入っていて、個人発表みたいな感じですか。

酒井：はい。ゼミに入るまで、1・2年生ではそういうのはあまりなかったのですが、ゼミに入って、「あっ、やっとそういう授業が始まったな」という感じです。

杉谷：史学科にも、基礎演習みたいなものがあるのですか？

酒井：2年生のときにありました。

杉谷：それは、あまりプレゼンとかは出てこなかったのですか？

酒井：それも、プレゼンは一応あるのですが、静かな部屋で、一人が前でずっと何かを読んでいるだけみたいな感じになってしまって、みんなでわあわあ議論するというのがなかったですね。

戸田：史学科なんかは学問の性質上、一人でコツコツの世界だからかもしれないですね。

長谷川：図書館の使い勝手はどうですか？

酒井：こういうことを言っているのかな。ちょっと古くなって、机にガタがきていて書いていると揺れたりします。椅子もちょっと劣化はあるのですが、静かで環境がすごくいいのでそれでカバーされているという感じです。

木村：図書館なんかはチャイムが鳴らないから、うっかりすると時間が過ぎてしまいます。危険ですよ。

長谷川：なるほど。

戸田：チャイムを鳴らなくしているのは、静かにということでしょうかね。

木村：チャイムは鳴らないですよ。

酒井：そうですね、あまり聞いたことがないです。

長谷川：そうですね。それは気が付かなかったです。

大山：話が少々飛びますが、私の学校はチャイムが一切ない学校だったので、逆にここへ来て「チャイムが鳴るんだ」とびっくりしました。

～いい授業とは～

杉谷：考えてみると、今回書いてくれた授業のことだけではなくて、お二人にとっていい授業というのはどういう授業なのか、もしよかったら教えてもらえますか？

大山：具体的な授業でもいいです。

木村：青スタも学部の授業もそうですが、特に法学部とかも顕著ですけど、先生との距離がすごく遠いですよ。つまり、1人の先生に対して、パーッと人数がいて、多分その中でやる気がある生徒にとっては、レポートの提出の際等で先生と話す

機会があったりしたときに、その授業が特別な存在になるのだと思います。僕も第二外国語がフランス語で、フランス人の先生と話したりするのですが、その先生はみんなのことをちゃんと覚えていて、例えば部活とかサークルとかそういう個人的な話題を振ってくれるので、親近感があってちゃんとまじめに受けようという気になります。それが大教室で、「はい。そこ静かに」みたいに集団単位でさされたりすると、eラーニングの授業を受けているような感じでこちらから発言することはできないとか、一方的なものになってしまいます。今まで心に残った特別な授業というのは、全部、何かしら先生との接点がありました。

大山：耳が痛いなあ。

杉谷：距離が近い授業ということですね。大人数のものでは、あまりないですか？やはり距離が近くなるように工夫されていた先生とか。

木村：1回だけありました。理工学部の先生だったのですが、青スタの科学と技術の視点の授業で受講者が多いのですけれども、自分で風船を大量に買ってきて全員に配ってくれました。それを伸ばして「エントロピーの実験」をみんなでやったり、レーザーポインターを頭のところに持ってきて光をこうやったりして、みんながラフな感じになりました。誰かチョコレートを食べている人がいたら、先生がそこにやってきて、「俺にもくれ」みたいに話しかけていました。その授業は心に残りました。「ああ、理工のほうは、こんな面白い先生がいるのか」とか、「じゃあ、そっちに行こうかな」と思ったりもしました。違いますよ、やはり。実際に教科書とかスライドで淡々とやられるより、大教室でも、先生が近くにきて話してくれたりしたら、それでもいいのです、本当に。さすがに風船を配っていたのには、びっくりしました。

杉谷：はい。酒井さんは、どうですか。

酒井：私は、学生と先生の距離が近い授業がいいと思います。少人数だとそうなると思うのですが、大教室はなりにくいというのがあります。でも、自分が今年の前期に受けた青スタの授業で、先生が「書いてください」とリアクションペーパーを配って、その中から先生が「ああ、いいな」と思ったものを次の実習の最初に発表するというのがありました。自分もそこで読まれたときはすごくうれしいし、次の授業の励みにもなります。何よりも、ほかの学生がどういうことを考えているのか聞けるので、直接的にはその学生との関わりはないのですが、そうやってほかの学生のいろいろな意見を聞くと間接的にすごく結びついているようで、決して先生が一方的にやるのではなくてすごく密になっていると感じました。

杉谷：では、フィードバックがあって、ほかの人との関係性とか、コミュニケーションを少し擬似的に体験できるということかしら。

木村：僕らは、高校のときから何も変わっていないので、正直に言うと、大学でも高校4年生だから、相手にされないというのが一番つらいのです。大学では、よく友達がいないと本当に駄目コースに走るとか、すぐ家に帰ってしまうとか言われていると思うのですが、やはり大学の先生と高校の先生は違いますからそれが大きいところですね。僕らは何も変わっていないので、本当に積極的に話しかけてきてほしいし、褒めてほしいし、ときには厳しく叱ってほしいです。適当に「もう寝ていいよ」とか、「うるさいから」と言うのではなくて。やはり本音で教授が向かってきていないというのは分かりますね、そういうところでは。「すごいな」と思う教授もいますし、バックグラウンドはすごいけれども「授業は一方的だな」という感じの先生もいます。

杉谷：せっかくですから、松本くんは？

大山：いや、なんだったら、ほかの大学を訪問もしている松本くんの意見をぜひ。

杉谷：「いい授業って、なあに」というテーマで、学生FDでイベントをやってなかったですか？

松本：そうですね。先日、神奈川大学のFD研修会で、ちょうど先生方とお話しする機会がありました。やはり先生方も学生さんと仲良くなりたいという本当におっしゃっていて、先生方も学生とうまく接することができないし、学生もその先生が持っている力を引き出すことができていないというお話を諸先生から伺いました。学生自身も変わらないといけないと僕自身も非常に思っていて、「それをどうすればいいんだ」というところで議論では終わってしまったのですけれども。例えば、授業で質問したいときがあります。大教室でみんなと集まって授業を受けるにしても、「この先生、今どういうことを言ってるの？」みたいな感じで質問したいときがあるのに、先生がもう授業をやっちゃってととても質問できる雰囲気ではないので、「じゃあ、最後にやるか」となるのですけれども、最後になるというときにはもう忘れています。そこで、どうにか先生とうまく対話ができるような空間を作り出せたらいいという話がありました。ある大学ではクリッカー等を使用して、「いま君たちはどういう感じで考えているの？」という質問に学生達がクリッカーで回答し、それをプロジェクターに映し出して「これやったのは誰？」といった風にやりとりをして、教員と学生の溝を埋めるような努力は結構されているというお話を伺いました。先生方もそうですが、僕自身も「うまく先

生方とコミュニケーションを取るような何かをしなければいけないのかな」と思った次第です。そんな感じです。いい授業というのはなかなか難しいですけども、信頼関係や人との関係性が非常に重要なのかなと僕自身は思いました。

大山：『坊主憎けりや袈裟（けさ）まで憎い』ではないですけども、先生との相性で「この科目は嫌い」というのは、率直に言ってありましたものね。今、それが全部、自分に返ってくるのですけれども。

杉谷：確かに、先生のほうがどう関わってくるかというのも結構難しいと思うのかもしれませんが。世代間のギャップもあります。

長谷川：ただ、さっきのリアクションペーパーの使い方とかは「具体的にこういう使い方があります」と、題材としてそういうのを少し作ったりすると役に立つかもしれません。

杉谷：そうですね。基本的に全部の授業で、そういうのができればいいのでしょうかけれども、なかなか。

長谷川：それは、なかなか難しいところがありますよね。いろいろ反省するところはあるんですけども。確かに「質問ありますか」と言われても、なかなかしにくいですよ。

松本：大教室とかだとかなり質問しにくいという話が、学生の皆さんから挙がりました。

大山：私は前に、授業が終わったあとに学生が何か聞いていたりすると、そこへ行って「どうしたの」というふうにやっていたことがありますが、それもあまり良くないらしいです。つまり学生同士で教え合うのが一番良くて、それを横で聞いていて解決するのを待つということです。次の時間とかがなければそれができるのですが、あったりするとお互いが、学生さん側がそういうことをできないでしょう。

鳥海：木村さんも国際公務指導室では、上級生が下級生を教えるという機会が結構あると思います。やはり教えるということは、自分の勉強にもなりますか。

木村：なります。指導室に入っていると、経済と国際法と憲法それぞれで毎週担当が変わって、自分でレジュメを作らないといけないので、教科書を読んであらかじめレジュメを作って、毎週木曜までに全員にメールで配布して、実際に前に立って教えるという流れになっています。先生が関与しない分だけたぶんお互いに厳しくて、指導室に入っている人たちは教えることがうまいし、教え合っただけで学んできたので優秀な学生同士のコネクションを非常に大切にしています。

大山：憲法とか国際法といった教科の内容についてたぶん今言われたと思うのですが、それだけではなくて、やはり先輩から言われたことは、自分たちもそうでしたけれどもちゃんと聞いて

ていました。もっと言ってしまうと、教員が言ったことなんて「ふーん」という感じでした。そういう場ができればいいなというのがありますね。

木村：そうですね。一番近い人から言われると言葉が沁みますね。

大山：ですから相模原だと、私は厚木の頃は知らないのですけれども、放牧、つまりほったらかしとか言われていたのですが、皆さんから見てもやはりまだ放牧のように感じますか。さっきの話ですと、やはり距離が遠いとか。

木村：放牧ですか。

大山：学生はほったらかしで、教員は授業があるときだけで、すぐに帰ってしまうという。

長谷川：昔は厚木という山奥にキャンパスがありました。牧場みたいな感覚で、授業のときは学生を羊さんみたいに集めて授業をやりまして、学生は放牧されているから適当に聞いて、先生は授業が終わるとすぐに、研究室もないので、帰ってしまいます。学生さんは適当に遊んでいるというイメージなのです。

戸田：駅までバスで30分かかるし、簡単には戻れないので。

長谷川：でも最近、だんだん学部の管理が厳しくなっていて、1年生のときからゼミをやるところも出てきています。大学側の学生管理というところとちょっと言葉が悪いのですけれども、大学のほうも勉強させる仕組みを少し工夫しているというのが今の姿ですよ。

～学生同士での学び～

木村：授業で、学生同士のまとまりとかを作っていただくとうれしいですね。すごくたくさん人数がいても、例えば Course Power である程度その班分けをして分からないことがあったらお互いに聞くとか、課題はこの人たちと一緒に出すとか、強制的に組まされたほうが実はやりやすかったりします。

大山：そうですね。

木村：はい。本当に友達がいなくて「じゃあ、親しい人で組んで」となると、「コミュ障で無理」となってしまう。もう決まっているから話せるというのがあって、その中で新しい人間関係や友達ができるというのは強いですね。仲良しでやるよりも。

杉谷：木村さん、この授業では自由に誰と組んでもいいような感じだったのですか。

木村：そうです。

杉谷：そこら辺は、うまくばらけて組めたのですか？

木村：教室の右が女子で左が男子で、多分普通のクラス単位もそうですけれども、しばらくすると分離するというか、混ざっ

ているというか、男子・女子で別れるのですね。そうすると、男子の中で組んで、女子の中で組んでというふうになります。クラスにいる内進生を中心に集まら、そこはうまくできるのです。

長谷川：そうですか。でも文学部だと圧倒的に女の子が多いですよ。

酒井：そうですね。でも史学科だと、まだ男子が多いですね。英米文だと女子ばかりです。

杉谷：やはり、その学び合うような機会づくりや環境づくりということで、ある程度強制的にでもグループをつくと、新しい人間関係もできるし、となるでしょうね。全てがその教員の教育力だけというよりは、学生同士の学習力を極力高めていくという意味でも非常に大事なことだと思います。

木村：一人で勉強することほどつらいことはないです、僕の場合は。

大山：まさにそうですね、周りがやっていると自然にね。

鳥海：やはり場所とか環境をまず作るという意味で、今は設備よりもみんなが集まる時間が足りないということのほうが学びにくい要因ですか？

木村：昼休みがもう 10 分長かったら、ご飯を食べて「じゃ、昼休みに集まるか」となるのですが、今の段階では 2 時間目が押してしまってお飯を食べている人がいるということになってしまいます。放課後は高校のときは自由に使えたのですが、今はみんなバラバラで、アルバイトとかで絶対に集まれません。1 限の前とか、朝はもちろん来たくない人がいます。そうすれば、休み時間がすごく活かさなきゃいけない時間になってきます。

杉谷：友達とかは、どんな感じでどういう場で作っていくのかしら。一番はクラスとかサークルですか。

木村：僕は、結構特殊な人間関係が多いです。学内の催し物にインターンで行って、同じ大学の違う学部や学年の人と仲良くなりました。あとは指導室の友達の友達や、メディアセンターの中に集まってきた違う学生とかです。最初はこのクラスでしたが、合宿というか、オリエンテーションがありましたよね。

鳥海：フレッシュマンキャンプですか。

木村：フレッシュマンキャンプです。それで仲良くなったような感じはしたのですが、実際はそうではなかったです。今振り返ってみて、「分かんないものだな、人生は」という感じです。

杉谷：自分が積極的に関わってきた場所や人間関係の中で、だんだん広がってということですね。

木村：そうですね、動いていった先ですね。そう考えると、さっき言ったことと矛盾しますが、一時的に組まされた人間関係

というのは続かないですよ。

大山：そうですか。

木村：はい。ただ、女の子だと LINE 交換をして仲良くなってその後もやりとりがあるのですが、男同士だと、もう終わったから終わり、みたいな、学年が違ってても。続かない人間関係なので、それはそれであまり意味はなかったりします。そうすると友達の友達と食堂で一緒になったとか、そういった経験のほうが大きくて、話すきっかけというのは分からないものですね。

大山：少人数の授業でもすごく仲良くなると、今年なんかは 4 人しかいないのに休み時間とか全然しゃべらないこともあったりしました。仲良くなってくれるほうがやりやすいという部分もあるのですけれども。せっかくなのにもったいないなど、ちょっと私なんかは見ていて思ったりするのですけれども。それは仮のパターンですかね、いま木村くんが言われたように。木村：はい。僕が思うには、目的が違うので一時的でしかないです。

杉谷：酒井さんは 3 年目ですけれども、どうですか？

酒井：自分は性格が内気なものですから、なかなか自分から積極的に声を掛けられません。やはり大学というのは、本当にいろいろな都道府県から来ています。自分も地方から来ていますし、しかも多分そこから来てているのは自分一人だと思うのです。ほかに高校のときの友達というは一緒に来てなくて、いきなり誰も知らないところに飛び込んで。最初の新入生オリエンテーションでそれぞれの学科ごとに集まるのがあって、そのときに話した人と仲良くなったりはしたのですが、その後授業をいろいろ取っていく上でその授業の人と仲良くなっていきました。文学部ではそういうグループワークもないし、やはり一人一人が多いので、人間関係を作るというのはすごく難しいと感じました。

木村：サークルに入っていないと、圧倒的に人間関係が不利になるみたいな感じになってしまっているのですね、今は。

大山：そうですね。

木村：去年は本当に痛感しました。

杉谷：松本くんは、もう 4 年生で卒業前ですが。

松本：友達ですか。教育は 40 人が 1 クラスで、英語等の授業が全部クラスごとに受講するため、一緒にいることが多かったのでもそこは全然難しくなかったですね。すぐ団結して、その先生のもとで仲良くやっていく感じでした。教育はどのクラスもそんな感じで仲良くなれたので、友達づくりという面では結構恵まれた環境にいたのかもしれない。ただ、そういったほかの学部のお話とかを聞くと、やはり同じクラスでも全然知らない人というのはたくさんいるし、そこで、どういった感じに仲良

くなっていこうかというのが非常に難しいということをみんな言っているので、そういった環境というのが結構大きく左右するのかなと思いました。

杉谷：そうなのですね。

長谷川：社会系の学部だとなかなか難しいかもしれないですね。規模が大きいし、今は、あまり語学のクラス単位が機能しなくなっていますから。

大山：そうですね。昔だと、私も松本さんと似たような授業でした。こういう中で仲良くなっていくということがあったのですけれども。今は能力別に割り振ってしまって、クラスが違っていると、同じでも違うのです。

杉谷：そろそろお時間のようです。今日はいろいろお話を聞かせていただいてありがとうございます。受賞されたお二人は、本当に自分から積極的に授業にコミットされているということがすごくよく分かりました。非常に望ましい理想的な学生さんだと思います。ぜひ、これからも勉強を頑張ってほしいと思います。おめでとうございました。

長谷川：おめでとうございます。

酒井・木村：ありがとうございます。



表彰式および座談会に出席された受賞者と 学生 FD スタッフ代表ならびに全学 FD 委員教職員